

学位論文題名

柿本人麻呂研究 別離の主題

学位論文内容の要旨

万葉集を代表する歌人柿本人麻呂は、持統朝の宮廷歌人として知られるが、行幸従駕の折のいわゆる宮廷讃歌を除く作品の多くは、むしろ私的な題材をその主要なモチーフないしはテーマとするものであり、かかる作品群を考察の対象とすることは、歌人人麻呂を総体としてとらえるひとつの有効な方法といえる。本論は、人麻呂の「配偶者との別離」を主題とする作品について、主として異伝分析と連作論・作品構造論の視点から論じたものである。人麻呂作歌の異伝に関しては、人麻呂自身による作品演練の営みと見る立場が有力だが、伊藤氏もこの立場に依拠しつつ、実証的な表現分析をおこない異文から本文への改作・推敲のあとを克明にたどることにより、作品の主題がどの様に表現に結実・深化していったかをあつづけている。また同様な分析手法により作品構造(歌群の連作的な構成)をあきらかにし、そこに主題実現のための作者の創意を見出すことを試みている。

序章では、人麻呂の作品のうち「配偶者との別離」を主題とするもの、という観点から五作品「石見相聞歌」「献呈挽歌」「明日香皇女殯宮挽歌」「泣血哀慟歌」及び「羈旅歌八首」を抽出し論じていくことを表明し、それら作品の概要を説明する。またその分析の視点として、「異伝」「連作」「構成」を提示し、各章の検討内容を概観する。

第一章は人麻呂の相聞長歌として人口に膾炙している「石見相聞歌」(巻二)について、主として連作論の視点から考察を試みたものである。しばしば同工異曲といわれている第Ⅰと第Ⅱの両歌群の構成の相違点に留意しつつ、「妹」の形象化に考察を加え、両歌群が叙述の構成を揃えるのは、「別離」にかかわる「見納め山」の発想を描くために用いられた手法で、両歌群における「見む」の出現位置の相違は、「見納め山」の「我」の位置の相違(山頂以後と以前)を示すものと捉え、その面から「妹」の形象化の方法を論じている。すなわち、第Ⅱ歌群では生身の「妹」への執着が歌われるのに対して、第Ⅰ歌群では「妹」との決定的な「別れ」を認識した「我」が描かれる、とする。おおむね首肯できる分析である。

続いて第二章では、異文と本文との比較の観点から泊瀬部皇女・忍坂部皇子への「献呈挽歌」(同)の挽歌的叙情の方法を論ずる。当該作品では従来、異文歌と本文歌の「不寐者」の訓について、同一表記であることから同じく「寝ねば」と訓まれているが、異文の訓は語法上「寝ずは」と訓まれるべきであるとの新見を提示する。またこれにより、異文の訓は「ズハ」で仮定条件(=埋葬以前)を表し、本文の訓は「ネバ」で確定条件(=埋葬以後)を表すことになり、反歌の「過ぎぬ」と「過ぎ行く」の相違、「君も逢ふやと」「逢ふやと思ひて」の相違と相俟って、異文と本文とは、立脚する時点の異なる二つの作品となる、と論証する。当該作品の研究に新展開をもたらしたものであるとして評価できる。

次に第三章は、同じく異伝分析の視点から、人麻呂の代表的な宮廷挽歌作品「明日香皇女殯宮挽歌」(同)を論じたものである。異文歌と本文歌に共通して歌われる「明日」について、異文の

「明日さへ」は継続的な「明日」を表し、本文の「明日だに」は隔絶的な「明日」を表すと見るところから、その他の異文の検討とも重ねて、異文歌は殯宮期間中の認識、本文歌は殯宮終了時の認識を表すものであり、異文と本文の関係は「献呈挽歌」と同様に立脚時点と抒情の方向の相違する二つの作品と考えられる、との結論を導く。すなわち、「献呈挽歌」と「明日香皇女殯宮挽歌」とは、ともに皇子皇女の死を扱うだけでなく、それぞれの異伝は埋葬までと埋葬以後、殯宮期間中と殯宮終了時という、喪葬をめぐる「時」に関わるものであることが論証されている。

第四章は、いわゆる亡妻挽歌の嚆矢と目される「泣血哀慟歌」(同)の、第Ⅱ歌群に登場する種々の山名について、その相違はモチーフや主題の問題と不可分であるとの観点から分析したものである。死者のおもむいた同一の山をさすと考えられる山名が、長歌には「羽易の山」とあるのに、反歌には「引手の山」、同異文歌には「引出の山」と現れるが、反歌の場合、その変化は異文歌から本文歌への「妹」の形象化の改変に連動させた推敲の一環と考えられ、また長歌の場合は異本文とも同一名称「羽易の山」で異なるところがないようだが、異文歌の場合は「引出の山」に対応させた「ハガヒ＝一羽の鳥の両翼の交叉」の意、一方、本文歌の場合は「引手の山」に対応させた「ハガヒ＝雌雄二鳥の羽の交叉」の意味と考えられ、異文と本文とでは「ハガヒ」の担う意味が相違する、との新見を示す。そして異なる話法—直接話法と間接話法—の導入が、かかる方法を支えていると指摘する。

第五章では引き続き「泣血哀慟歌」第Ⅱ歌群の、冒頭部の異伝について考察する。「妹」に冠せられる「春の葉」の意味が異文と本文とで変化することにより、「家の妻」としての「妹」から、「軽の地の妻」としての「妹」へと、「妹」の形象に重要な変化が生じていることを論証する。新見として評価できるが、「家の妻」から「軽の妻」への推敲の意図するところは何であったのか、もう一步踏み込んでの考察がされてしかるべきであろう。

さらに第六章も、同じく「泣血哀慟歌」第Ⅱ歌群を対象に、そこに登場する亡妻の忘れ形見「緑児」について考察したものである。この「緑児」は戸籍等に散見する語ではあるが、本作品にあっては、文脈との関係から「新芽ノヨウナ児」と比喩的なイメージを喚起するものと解釈され、さらに冒頭部で「春の葉」のようだったと形象されている亡き「妹」への哀惜を含む表現と連動して、全体の構成を担う表現として機能させられているのではないかとする。

第七章は、一転して短歌連作と称すべき「羈旅歌八首」(巻三)を俎上にのぼせる。この歌群は八首全てが地名を含むが、伊藤氏は、そのうち冒頭と末尾の二首を除く中の六首は旅中の夫の詠として構成されているとする。またその六首は枕詞の有無による地名表現の二形式により、「旅先」を志向する詠と「家」を志向する詠との、二首一組三つの構造を有することが知られると分析する。そして当歌群は、夫の旅中詠と家に待つ妻の詠とを組み合わせた、「旅」の別離の主題による、自立した構成を有する作品であると捉える。実証的な手法が確実な成果を見せている。

結章では各章の検討を承け、各作品における「別離の主題」実現の方法についてまとめると共に、残された課題に言及する。

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである。(400字詰原稿用紙換算約436枚)

序章	1
第一章 石見相聞歌論—別離の主題—	9
第二章 献呈挽歌論—異文歌と本文歌の「不寐者」—	26
第三章 明日香皇女殯宮挽歌論	41
第四章 泣血哀慟歌論 その一	56

第五章 泣血哀慟歌論 その二	68
第六章 泣血哀慟歌論 その三—「緑児」について—	84
第七章 羈旅歌八首論	98
結章	113
論文目録	
引用参考文献一覧	

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 富 田 康 之
副 査 教 授 南 部 昇

学 位 論 文 題 名

柿本人麻呂研究 別離の主題

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また口答試問を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、伊藤延子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達して、文学研究科教授会に報告した。研究科教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

本論文は、人麻呂の「配偶者との別離」を主題とする作品について、主として異伝分析と連作論・作品構造論の視点から論じたものである。人麻呂作歌の異伝に関しては、人麻呂自身による作品演練の営みと見る立場が有力だが、伊藤氏もこの立場に依拠しつつ、実証的な表現分析をおこない異文から本文への改作・推敲のあとを克明にたどることにより、作品の主題がどの様に表現に結実・深化していったかをあとづけている。また同様な分析手法により作品構造（歌群の連作的な構成）をあきらかにし、そこに主題実現のための作者の創意を見出すことを試み、多くの新見を提示している。

本論文は、基本的に用例等から着実な解釈を引き出す姿勢が一貫しており、またそこから訓詁・注釈上の新見も生まれていて、個別の論文として公表された段階で学界からも注目されており、人麻呂作品研究を一步前進させるものとして評価できる。だがその一面で、先行研究の紹介が十分になされず、その為に、なぜ今その論点が問題になるのかが理解しづらいこと、また、最初に自らが依拠する分析方法が明示されていないことなど、既発表の論を本論文に収めるための統一的な観点からの配慮にやや欠ける点が見られたことが惜まれる。また、「別離の主題」という観点からはやはり「泣血哀慟歌」がもっとも問題性をはらむ作品であろうが、伊藤氏の研究がいまだこの作品のI群長歌作品の考察に及んでいないことは、今後の大きな課題として十分に認識されるべきであろう。さらに副査のひとりからは、日本古代史学の立場から、本論文における史料の引用のしかたに未熟な点があることが指摘された。これも今後の課題としてさらに研鑽につとめることが求められよう。

しかしながら、これらも、本論文に示された伊藤氏の真摯な学問への熱意と着実な分析の努力、そのめざましい成果から見て、十分に克服され得るものであり、本論文は伊藤氏が今後も一個の自立した研究者として学界に貢献する研究を持續するための基盤を構築し得たものと評価できる。